

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730574

研究課題名（和文）不登校・ひきこもりの青年に対する実証的アセスメントおよび介入研究

研究課題名（英文）Assessment and Intervention for Adolescents with Truancy and Social Withdrawal

研究代表者

大対 香奈子 (OTSUI KANAKO)

近畿大学・総合社会学部・講師

研究者番号：8050927

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、不登校・ひきこもりの履歴のある青年を対象に、社会的スキルについてのアセスメントを行い、その結果をもとに SST (Social Skills Training) を実施してその効果を検証することであった。結果、SST は参加者の社会的スキルについての自己効力感を高める一定の効果があることが確認された。また、SST で学んだスキルを実践する機会を増やすことで、施設職員が評定する参加者の社会的スキルにも向上が見られ、SST の般化効果を示唆する結果も得られた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to conduct an assessment of the social skills of adolescents with a history of truancy and social withdrawal and to examine the effect of SST (Social Skills Training) which was developed based on the result of that assessment. It was found that SST improved participants' self-efficacy of social skills. Moreover, by adding practical sessions into intervention so that participants could have an opportunity to perform learned skills in actual daily situations, the staff's rating scores of participants' social skills increased. This result suggested that the practical sessions promoted to generalize the effect of SST.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1700,000	510,000	2,210,000
2010 年度	608,520	182,556	791,076
2011 年度	691,480	207,444	898,924
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：不登校、ひきこもり、青年、学校適応、社会的コンピテンス

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の着想に至った経緯

現在、小中学生の不登校の数は 12 万人を超すと言われており、高校生については約 6 万人の不登校が存在する。この深刻な状況を受けて、文部科学省は教育内容の充実や教員

の指導力向上を推進しており、また学界においても不登校の予防に焦点をあてた研究は、近年非常に増えてきている。これらの動向は、全て不登校をこの先増やさないということに主眼が置かれているが、一方で現在不登校やひきこもりの状態にある子どもの実態把

握や、効果的な対応についてはまだ十分な研究は進んでいないという現状がある。本研究では、不登校・ひきこもりの状態にある青年を対象として、特に社会性に焦点をあてたアセスメントおよび介入を実施した。

(2) 本研究に関連する国内外の研究動向

不登校やひきこもりは、直接的に観察することが難しいことから、その実態を客観的指標から明らかにしたアセスメントや、また効果的な介入方法について実証的に検討した研究は、それほど多くはない。一方で、不登校・ひきこもりとは対称的な概念である「学校適応」については、これまでも国内外で数多くの研究が行われている。これまでの研究から明らかになっている学校適応に関わる要因は、不登校やひきこもりのような学校不適応の状態とも密接に関わる要因であると考えられる。

戸ヶ崎・秋山・嶋田・坂野(1997)は、学校不適応の状態を表す指標のひとつである学校ストレスに注目し、学校ストレスに関連する要因として、友達との関係、教師との関係、学業場面という3つの因子を見出した。大久保(2005)は中高生を対象に調査を行い、この3つの要因が学校適応感にそれぞれどのように影響を及ぼしているのかを検討した。その結果、友達との関係が学校適応感に最も強い影響を及ぼしていることが明らかになった。これは、海外の研究結果とも一致する(例えば、Ladd, 1990)。このような知見から、学校適応と強く関わる友人との関係が良好でない場合には、それが不登校のリスク要因となることも十分に考えられる。実際に、文部科学省による平成22年度の報告によれば、不登校の小中学生のうち、17.5%は友人関係をめぐり問題がそのきっかけとなっている。本研究で社会性の側面に注目している理由は、これらの先行研究の知見に基づいている。

2. 研究の目的

本研究では、以下の3点を明らかにすることを目的とする。

(1) 不登校・ひきこもりの状態にある青年の、ソーシャルスキルについてアセスメントを行い、ソーシャルスキルの程度について明らかにするとともに、不登校・ひきこもりの青年に必要なSSTのプログラムを作成すること。

(2) 心理学の専門家ではない施設職員がSSTを実施した場合にもSSTの介入効果が確認されるかについて検討を行うこと。

(3) 介入結果や、また一般高校生と施設に入所・通所する青年とのソーシャルスキルおよび仲間関係の比較から、より妥当性と効果の高いSSTプログラムにするためにはどのような改善が必要かについて検討すること。

3. 研究の方法

(1) 対象者

本研究の対象者は、大阪府の児童福祉施設に入所あるいは通所する高校生年齢の青年であった。対象者は不登校やひきこもりの履歴があり、不登校の初発時期は小学校から高校までと、その背景は様々である。個人情報保護の関係から、研究代表者およびこの研究に関わった者には、対象者の詳しい背景についての情報は共有されなかった。

(2) SSTの実施方法

実施したSSTプログラムは、コーチング法にならない教示、モデリング、行動リハーサル、強化・フィードバックから毎回構成されていた。教示では、その日に取り上げるスキルの内容についての説明と、そのスキルについて練習をする意義などがトレーナーから説明された。モデリングでは、トレーナーが前で標的スキルとなる行動を典型的な設定場面でやって見せた。行動リハーサルではトレーニング参加者が実際にスキルをいくつかの場面設定でロールプレイをしながら練習を行った。行動リハーサルの最中や、セッションの最後にはトレーナーから参加者が上手にできていた点などをフィードバックし、強化した。

また、参加者同士が早く打ち解け、居心地よくセッションに参加できるようにするために、毎回セッションを始める前にはアクティビティと称した簡単なゲームを行った。

1セッションはこのアクティビティとSSTで構成されており、約2時間のプログラムとして実施された。トレーナーは毎回、施設の職員が2~3名で担当し、セッションの進行や参加者へのフィードバック等を行った。研究代表者もセッションに参加し、プログラムの内容や進め方、また参加者に応じたプログラムの調整などについて、職員にコンサルテーションを行いながら進めた。

(3) アセスメントに用いた指標

① 標的スキルの自己評定

毎回のセッションでトレーニングの標的としたスキルは、いくつかの具体的な行動項目として参加者に呈示された。例えば、「関係開始・維持スキル」の第1回でとりあげた「あいさつをしよう」というセッションでは、「1. 相手から見えるところに行く」「2. 相手の方を見る」「3. 相手に聞こえる大きさの声で言う」「4. 相手や場面に合った言い方で言う」「5. 笑顔で言う」という5つの行動項目を参加者に呈示し、練習を行った。標的スキルの自己評定では、この5つの行動項目について、セッション開始前と開始後に「どれくらいできると思うか」を5件法で評定させた。

② 社会的スキルの自己評定

2009年度

・嶋田(1998)の社会的スキル尺度

・上野・岡田（2006）のソーシャルスキル尺度のうち「アサーション」の下位尺度
2010年度および2011年度

・相川・藤田（2005）の成人用ソーシャルスキル自己評定尺度

③ 社会的スキルの他者評定

施設の心理職員に依頼をし、参加者の担当になっている職員に日頃の観察をもとに参加者の社会的スキルについて下記の尺度を用いて評定をしてもらった。

・上野・岡田（2006）のソーシャルスキル尺度

4. 研究成果

(1) 実施した SST とその効果

2009 年度

① 実施した SST の内容と参加状況

実施時期は2009年5月～2010年2月であった。実施内容は、関係開始・維持スキル（6セッション）、頼むスキル（3セッション）、断るスキル（3セッション）、面接スキル（2セッション）の合計14セッションであり、合計参加者（1回以上のセッションに参加した人数）26名、平均参加者数8.9名、10回以上の参加者5名であった。

② 標的スキルの自己評定の変化

参加者の自己報告による標的スキルの評定がセッションの前後でどのように変化したかを検討した。なお、参加者は各セッションごとにその人数や構成員が異なるため、セッションごとにt検定を行った。「関係開始・維持スキル」の6回目のセッションについては、内容が復習だったため、標的スキルの自己評定を行っていない。

セッション前とセッション後の平均値を見ると、「断るスキル」1回目の「上手に断ろう（基本編）」以外の全てのセッションで、トレーニング後の評定値が高くなっていた。セッションごとにt検定を行った結果、面接スキル以外では、各スキルに含まれる少なくとも1セッションは介入後の自己評定の値が有意に高くなっていた。この結果より、参加者はSST実施後、概ね全ての標的スキルを実行できるという自己効力感が高まったと言える。

③ 社会的スキルの自己評定の変化

10回以上のセッションに参加した参加者について、SST開始前と開始後に、参加者自身の社会的スキルについて評定をさせた。10回以上参加した参加者5名のうち、開始前と開始後の両方で評定が実施できたのは4名であった。結果はFig. 1.に示した通りである。少人数であるため、統計的な分析は行っていない。

この結果より、特に「頼むスキル」「断るスキル」を含むアサーションスキルはSST実施後に高くなっていることが示されたが、向社会的スキル、引っ込み思案行動、攻撃行

動についてはSSTの前後で大きな変化は見られなかった。

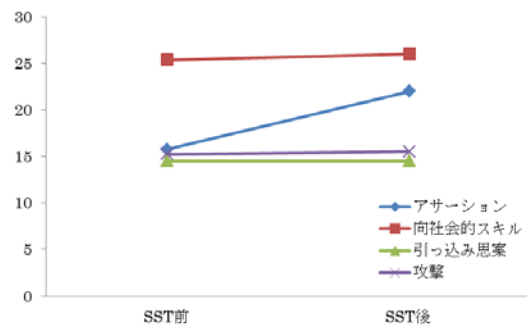


Fig. 1. 社会的スキルの自己評定の変化（2009年度）

④ 社会的スキルの他者評定の変化

同じく、10回以上のセッションに参加した参加者について、SST開始前と開始後に、担当職員による社会的スキルの評定を行った。その結果をFig. 2.に示す。

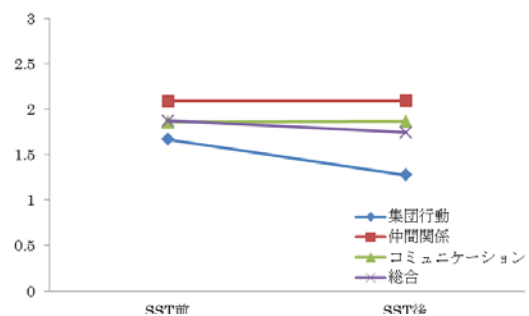


Fig. 2. 社会的スキルの他者評定の変化（2009年度）

この結果より、社会的スキルの職員による評定では、SST実施後のスキルの向上は確認されず、「集団行動」についてはSST後に低下しているようにも見られた。

2010 年度

① 実施した SST の内容と参加状況

実施時期は2010年5月～2011年2月であった。実施内容は関係開始・維持スキル（5セッション）、伝えるスキル（3セッション）、断るスキル（2セッション）、問題解決スキル（2セッション）面接スキル（2セッション）と、面接スキル以外の各スキルについて実践練習を1セッションずつの合計18セッションであった。2009年度の結果より、以下に述べるいくつかの改善を行った。

各スキルの実施内容は2～5セッションで構成されていたが、関連した内容についてはできるだけ連続して学習ができるように、毎週1回のペースでトレーニングを実施するようにした。1つのスキルについてトレーニングが終わると、次のスキルのセッションの開始までは2週間から1か月ほどの準備期間をあげた。

また、学習したスキルを日常生活の中で実行できるように般化を促進する目的で、各スキルの最終セッションの後には「実践編」ということで、施設外に出て、実際に練習してきたスキルを使ってみる体験を行った。

2010年度の参加者は、全体的に介入前の時点でのスキルがある程度高かったこともあり、より複雑なスキルとして「問題解決スキル」を標的スキルに加えた。また、2009年度には「頼むスキル」としていた内容については、「伝えるスキル」と変更し、内容は「頼む」に加えて「気持ちを伝える」ということも含めた。

SSTへの合計参加者は40名であり、平均参加者数13.5名、10回以上の参加者は12名であった。

② 標的スキルの自己評価の変化

2009年度と同様に、各セッションで練習した行動項目について自己評価を行った。セッション前とセッション後の平均値を見ると、全てのセッションでトレーニング後の評価値が高くなっていた。セッションごとにt検定を行った結果、全ての標的スキルにおいて、少なくとも1セッションは評価値がトレーニング後に有意に上昇していることがわかった。以上の結果より、2010年度に実施したSSTのプログラム内容は、参加者の標的スキルについての自己効力感を高めることに効果的であったということが言える。

③ 社会的スキルの自己評価の変化

10回以上のセッションに参加した参加者について、SST開始前と開始後に、参加者自身の社会的スキルについて評価をさせた。10回以上の参加者のうちと開始後の両方で評価が実施できたのは9名であった。結果は

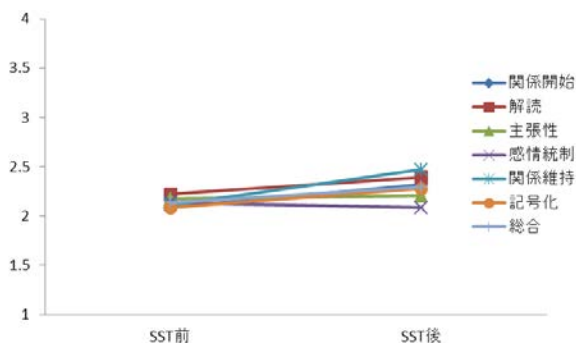


Fig. 3. 社会的スキルの自己評価の変化 (2010年度)

Fig. 3.に示した通りである。

この結果より、感情統制と主張性についてはSSTの前後で変化は見られなかったものの、その他のスキルについては、SST実施後に得点の上昇が認められた。t検定により検討したところ、関係維持については有意な傾向でSST後の得点が高かったが、その他のスキルの下位尺度については、統計的には有意な差は見られなかった。これは、もともとの

スキルの得点や、SSTの結果としての得点変化の仕方に、個人差が大きかったことが要因の一つとして考えられる。

④ 社会的スキルの他者評価の変化

10回以上のセッションに参加した参加者12名について、SST開始前と開始後に、担当職員による社会的スキルの評価を行った。その結果をFig. 4.に示す。

この結果より、職員の評価の結果も全体的にSST実施後に高くなっていることがわかる。t検定の結果、集団行動については有意な変化は認められなかったものの、それ以外については全て有意に変化していることが認められた。

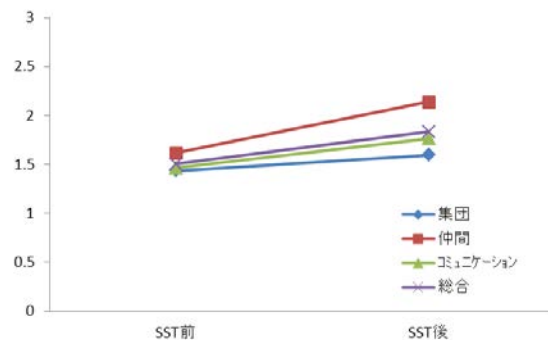


Fig. 4. 社会的スキルの他者評価の変化 (2010年度)

2011年度

① 実施したSSTの内容と参加状況

実施時期は2011年5月～2012年2月であった。実施内容は関係開始・維持スキル(5セッション)、断るスキル(2セッション)、伝えるスキル(3セッション)、話し合いスキル(2セッション)面接スキル(3セッション)と、面接スキル以外の各スキルについて実践練習を1セッションずつの合計19セッションであり、2010年度の結果を受けて、以下に述べる改善を行った。

基本的な内容は2010年度のもの踏襲する形で実施した。問題解決スキルについては、2010年度に実施した際に、自己評価では介入の効果は見られていたものの、実際にトレーナーを務めた職員から実施上の様々な問題点が挙げられた。そこで、2011年度は「問題解決スキル」を「話し合いスキル」に変更して実施した。「話し合いスキル」を標的として取り上げた理由は、施設職員への聞き取りや、それまでのSSTセッション内での参加者の観察から、グループ活動になると自分の意見をうまく言えなかったり、またグループの中で出てきた異なる意見をグループの意見として一つにまとめることが苦手であるということが見られたためである。

また、「伝えるスキル」の内容として2010年度は「気持ちを伝える」ということを含めていたが、参加者にとっての目標が不明瞭で

あったことが報告されたため、2011年度は「気持ちを伝える」の内容を、「ありがとう、ごめんねを上手に伝える」とし、より気持ちを伝える場面を具体化して実施した。「面接スキル」については、これまで2セッションで実施していたものを、1セッション追加し、集団面接場面の内容を新たに含めて行った。このように、2011年度の内容は、グループ、集団というものを意識した内容をさらに増やして、練習するようになった。

SSTへの合計参加者は19名、平均参加者数6.3名、10回以上の参加者は5名であった。

② 標的スキルの自己評定の変化

2009年度、2010年度と同様に、各セッションの標的スキルについて自己評定を行った。セッション前とセッション後の平均値を見ると、「伝えるスキル」第1回の「自己表現しよう」というセッション以外の全てのセッションにおいて、自己評定値がトレーニング後には上がっていた。また2009年度、2010年度と同様に、全てのスキルにおいて少なくとも1つ以上のセッションでトレーニング後に自己評定値が高まっていることが確認された。

③ 社会的スキルの自己評定の変化

10回以上のセッションに参加した参加者について、SST開始前と開始後に、参加者自身の社会的スキルについて評定をさせた。Fig. 5.に示したのは、10回以上のセッション参加した5名の、社会的スキルの変化である。

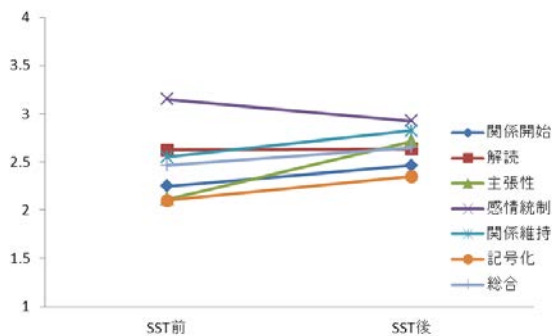


Fig. 5. 社会的スキルの自己評定の変化 (2011年度)

この結果より、感情統制以外のスキルについて、SST開始前よりSST開始後の方が評定値が全体的に高くなっていることがわかる。特に、主張性については、SST実施後に得点が大きく上昇していた。対象者が少数のために、統計的検討は行っていない。

④ 社会的スキルの他者評定の変化

2011年度は、職員による評定を実施できなかった。

(2) 高校生と不登校・ひきこもりの青年との比較

本研究で実施したSSTのプログラムは、実際にトレーニングに参加した対象者へのアセスメントの結果に基づき作成された。この

ような標的スキルの選定の仕方は、対象者内でどのスキルが高いか、低いかにということをもとに検討し、決定したことになる。本研究の対象者は不登校・ひきこもりの履歴があり、特殊な背景をもつ青年であることや、最終目標として復学や就職を前提としたSSTであることを考えると、対象者が今後生活していく環境となる高校や職場で通用するスキルを身につけておく必要がある。したがって、実際に高校生とSSTに参加している施設の青年とで、どのように社会的スキルに違いが見られるのかを検討することは、プログラムの妥当性を高めるためにも重要である。

そこで、2009年度に小規模ではあるが、大阪府下の公立高校1年生40名(男子19名、女子21名)と、施設の青年31名(男子20名、女子11名、平均年齢16歳)を対象に調査を実施し、社会的スキルおよびソーシャルサポートにどのような違いが見られるかを検討した(大対, 2011)。社会的スキルの尺度として用いたものは、本研究の効果検証で社会的スキルの自己評定として2009年度に使用した尺度と同様のものであった。ソーシャルサポートについては、久田・千田・箕口(1989)が開発した学生用ソーシャル・サポート尺度(The Scale of Expectancy for Social Support; SESS)を、岡安・嶋田・坂野(1993)が中学生用に一部項目の表現を修正したものを用いた。

社会的スキルの4つの下位尺度とソーシャルサポートの得点についてt検定を行った結果、社会的スキルのアサーションと攻撃行動、またソーシャルサポートにおいて有意な傾向で差が見られた(Table 1)。

Table 1 一般高校生と施設青年の社会的スキルおよびソーシャルサポートの比較

	一般高校生 平均値 (SD)	施設青年 平均値 (SD)	t
社会的スキル			
アサーション	20.2 (3.8)	18.4 (4.1)	1.79†
向社会的行動	30.0 (4.4)	28.2 (5.2)	1.49
引っこみ思案	16.9 (3.6)	17.5 (4.3)	0.71
攻撃行動	11.8 (4.1)	13.5 (3.8)	1.81†
ソーシャルサポート	47.4 (10.5)	42.5 (9.9)	1.92†

Note. ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .1$

アサーションについては、一般高校生の方が不登校青年よりも有意な傾向で得点が高かったのに対し、攻撃行動については、不登校青年の方が一般高校生よりも有意な傾向で得点が高かった。ソーシャルサポートについては、不登校生徒よりも一般高校生の方が知覚しているサポートが有意な傾向で高いことが分かった。向社会的行動と引っこみ思案行動については、一般高校生と不登校生徒の間に有意な差は見られなかった。

一般高校生に比べ、不登校生徒はアサーションスキルやソーシャルサポートが低い傾向が見られ、これは先行研究とも一致した結果であった。特に、アサーションスキルやソーシャルサポートは「学校が好きである」という学校肯定感とも強く関連しており、学校不適応を呈する青年への支援として、アサーションスキルやソーシャルサポートを高める介入は重要であると言える。

(3) 総合考察

本研究では、3年間にわたり大阪府の児童福祉施設にて、不登校・ひきこもりの履歴のある青年を対象にアセスメントとそれに基づくSSTを行い、不登校・ひきこもりの青年の社会的スキルに見られる特徴と、実施したSSTの効果を一明らかにすることを目的としていた。

SSTの参加者は、安定してトレーニング後に社会的スキルに対する自己効力感が高まっていたことから、本研究で実施したSSTは社会的スキルの乏しい、不登校やひきこもりの青年が「自分でうまく人と関われる」という自信を取り戻すためには、一定の効果があることが認められた。

本研究では、トレーニングは全て施設の職員が実施したが、SSTの効果は専門的な知識や技術を持った研究者グループが実施した場合と変わらずに確認することができた。したがって、本研究で実施したSSTの効果は安定していると言えるだろう。

また、2010年度からのプログラム内容の改善により、セッション内の練習だけでなく、実際に練習したスキルを施設の外で使ってみるという「実践編」を導入することで、他者評定でもスキルの向上が認められるほどの効果を上げることができた。したがって、実践編の導入により、SST効果の般化が促進されたことが示唆される。

3年間のSSTで取り上げた標的スキルには必ずアサーションに関係する「頼むスキル」「断るスキル」が含まれていた。一般高校生と施設青年との比較によると、不登校・ひきこもりの背景を持つ青年は一般高校生に比べてアサーションのスキルが低いことが示された。したがって、本研究でアサーションスキルを常に標的スキルとして含めてきたということには、施設を出てから適応していく環境にも必要とされる妥当性の高いプログラムになっていたと言えるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 大対香奈子 (2011). 高校生の学校適応と社会的スキルおよびソーシャルサポートとの関連～不登校生徒との比較～ 近畿大学総合社会学部紀要, 1, 23-33. (査読

無)

[学会発表] (計9件)

- ① 大対香奈子 (2011). 社会的スキル訓練による学校適応促進の効果, 日本行動療法学会第37回大会 (2011/11/28; 東京家政大学: 東京都)
- ② 大対香奈子 (2010). 高校生の学校適応についての検討—不登校生徒との比較—, 日本心理学会第74回大会 (2010/9/21; 大阪大学: 大阪府)
- ③ 福井智子・塩見沙織・服部隆志・大対香奈子 (2010). 青年期の不登校ひきこもり児童へのSSTの実践(1), 心理臨床学会第29回秋季大会 (2010/9/4; 東北大学: 宮城県)
- ④ 塩見沙織・服部隆志・福井智子・大対香奈子 (2010). 青年期の不登校ひきこもり児童へのSSTの実践(2), 心理臨床学会第29回秋季大会 (2010/9/4; 東北大学: 宮城県)
- ⑤ 服部隆志・福井智子・塩見沙織・大対香奈子 (2010). 青年期の不登校ひきこもり児童へのSSTの実践(3), 心理臨床学会第29回秋季大会 (2010/9/4; 東北大学: 宮城県)
- ⑥ 大対香奈子 (2010). 個人の行動特徴と環境との相互作用から「適応」を捉える, 日本教育心理学会第52回大会 (2010/8/27; 早稲田大学: 東京都)
- ⑦ 大対香奈子 (2009). 子どもの社会的コンピテンスと学校適応, 日本心理学会第73回大会 (2009/8/28; 立命館大学: 京都府)
- ⑧ 大対香奈子 (2009). 児童生徒のソーシャルスキルと学校適応～アセスメントと介入の実証研究～, 日本心理学会第73回大会 (2009/8/26; 立命館大学: 京都府)
- ⑨ Otsui, K. (2009). Social Skills Training for Japanese Adolescents with School Maladjustment: Program Development. The 36th Annual Applied Behavior Analysis Convention (2009/5/24; Phoenix, AZ, USA)

[図書] (計2件)

- ① 大対香奈子 (2011). 子どもの学校適応感を高めるには 教育と医学, pp.12-19. 慶応義塾大学出版会
- ② 大対香奈子 (2009). 子どもたちのつながり 大竹恵子・金政祐司(編) 健康と暮らしに役立つ心理学 第7章, pp.83-92. 北樹出版

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大対 香奈子 (OTSUI KANAKO)
近畿大学・総合社会学部・講師
研究者番号: 80509927